

## ジョイント合宿を終えて

### 鈴木宏明

ジョイントの発表では、分科会のほうでは「宇都宮の Facebook ページの作成」、共通発表では「地域社会に生きるベトナムの若者たち」についての発表を行った。分科会のほうをメインに準備を行っていった。そのため、共通発表のための準備の時間が足りなく、限られた時間の中で、レジュメを作り、パワポも作らなければいけないということでいろいろと忙しかった。途中の段階での発表では、先生たちに結論が弱い、もっとフィールドワークをしてみてはなどいろいろ指摘され、だいぶ焦りを感じた。それから、分科会のほうでは、Facebook ページを持っている自治体に直接電話して、聞き取り調査などもした。時間がなく、現地まで足を運ぶことができなかった。だが、時間がない中で、みんなで協力して何とかレジュメを作り上げることができた。

実際に、ジョイント合宿に参加して他大学の発表を聞いてみて思ったことがいくつかある。一つ目は、フィールドワークの面である。他大学は、フィールドワークで現地に足を運び、聞き取り調査をしたり、動画を撮ったりしていた。やはり、フィールドワークで得た情報は、重要で説得力もある。その点、私たちは、分科会のほうでは電話での聞き取り調査しかしておらず、現地に足が運べなかったため、そこが弱みになってしまったように感じた。もう少し早めにとりかかり、様々な自治体を訪問できたらよかった。これからの参考にしていきたい。二つ目は、質疑応答に関して。自分たちの質疑応答の時は、鋭い質問が来て、どう答えていいかわからず困ってしまったことがよくあった。しかし、他大学では、そのような質問が来ても、素早く対応し、説得力のある返答をしていたところもあった。これらのことも今後に生かしていきたい。

他大学の聞けるというのは貴重な体験だった。今回のジョイント合宿で一番ためになったことは、やはり、フィールドワークの重要性を学べたことだ。実際に現地に行ってみることで、得られる情報は多く、説得力のある情報得ることができる。フィールドワークの重要性を知ることができ、ためになった。

### 齋藤梓

ジョイント合宿に関して私が言及できることと言えば、この合宿自体を「未来化」させるとしたら、ということに尽きる。第一に紙媒体の資料配布の撤廃である。4月に編入して以来、私の「四大生」に対し驚くことの一つに「みんながノートをとっていること」があった。短大在学期間中、特に言えばイギリス留学中は、多くの学生が mac book や I pad、またはスマートフォンで資料を閲覧しながらメモを取り、ボードを写真撮影して仲間と共有し、わからないことは CiNii や Google books で即検索し調べるといったスタイルがあった。使える技術は全て使うということだ。

確かに閉鎖的な日本の教育分野ではこれらの変革は極めて「不真面目」と認識されるだろう。しかし、充実した福祉やエコロジーの精神・制度をもって、多くの学生たちから敬

愛・崇拜される北欧諸国や、近年富裕層の教育制度が高まる中東国では幼稚園の頃よりモバイルデバイスを使用したカリキュラムが導入され、会話や筆記の練習にそれらの機器を使用することが普遍化されつつある。日本のアカデミックな場面でも、柔軟で若い考えを持った経営者・指導者の下より、その様子を普及しようという動きが見られる。

今回の合宿に参加した大学の中には、いわゆる日本の未来を背負う若者—国家公務員や官僚となり日本の政治・文化を背負う役割を担う者・それを目指す者—が在籍する団体も存在したはずだ。彼らも当然モバイルデバイス片手に参加するはずだと思っただけに、数十枚もの膨大な紙を片手に移動する彼らを見ては、残念だ、という感情を覚えた。日本人はこのような新しいものの導入に、向き・不向き、合致・不一致を議論のポイントに置くが、ジョイントがこの先数十年も継続するとなれば、近い将来向き合わねばならない問題となるだろう。共通発表・分科会において Facebook やインターネット活用、または自然保護などのテーマが設定されるのであれば尚更である。幹事校学生はネット回線設備を重視した環境改善、データの共有形式を考慮していくことが求められる。

第二に、極めて女性が少数である点である。もう一度言うがジョイントは、教授陣の顔ぶれを見ても、将来の行政を担うか、多くの面で極めて強い発言権を持つ可能性を持った若者が集った場と言える。そこに、ヒトの半分存在するはずの女としての性を持つ者が10%しかいない、このことは私にとって不思議—ある意味当然—であった。女性がそのような分野に興味を持たないのか、女性が求められないフィールドであるのか、女性が排斥される場であるのか、理由は分からないが、女性がこのような場に存在する意義は議論を深める上で極めて重要な事項である。女性が多い議論はあまりにも感情的で、教授陣の意に沿うような展開が見込めないかもしれない。しかし、「グローバル」「多様性」を日本人の20代男性、日本社会の *catbird seat* に存在する者だけで議論することが可能だろうか。

ジョイントは数十年の歴史を持つ伝統ある会であり、多くの者にとってモチベーションとなる貴重な機会だ。しかし伝統は伝統のままにしておけば、観光地の時代遅れの民芸品の土産物に変わりはなくなる。ニーズをくみ取り、手を加えていくことでより魅力的になること、そして魅力の継続が可能となるのだ。

## 内田絢子

私は、サークルの関係でジョイント合宿の当日に出ることが出来ませんでした。最初に、このことが悔やまれます…。

共通テーマとして、ベトナムの外国人労働者について調査しましたが、留学生のビックさんの力がなければ完成することが出来なかったと思っています。本当にありがとうございました。私は国際交流協会へ外国人労働者に関するインタビューを行いました。中村ゼミに入ってから、電話取材やインタビューを何回か行ってきましたが、私は未だに緊張してしまいます。ですが、忙しい中、多くの質問に親切に、細かく教えて頂き、本当に聞き

やすい雰囲気でした。貴重な意見と体験をさせて頂きありがとうございました。

分科会では、まちづくり提案の論文をベースにし、スライドを作成しました。スライドをつくったものの、当日に行かなかったため、プレゼンに関して丸投げ状態になってしまったことは申し訳なかったです。

来年こそは、(幹事校というのもあり)合宿に参加してたくさん、サポートをしていけたら、と思っています。

## 成田尚樹

複数の大学が集結し、テーマ発表や議論を行うジョイントゼミ合宿。宇都宮大学は文科会については数か月の時間を要して調査を行ってきたものの、共通テーマについては短い時間の中で調査を行い発表の日を迎えました。分科会の調査では、地域団体を訪れ、現地で働く人の声を聴くことができ調査に反映させることができたと思います。また、発表では質疑応答の時間になると他大学から多くの質問があり、このジョイント合宿に懸ける学生の思いの強さを感じました。共通テーマは、前述の通り短い時間での仕上がりとなりましたが、学生間での意見交換や地域団体への調査がスムーズに行き、発表当日には学生に加えて他大学の先生方から多くの質問をいただきました。準グランプリをいただくことができましたが、もう少し時間があればとも思っていました。中村先生にはジョイント合宿のために色々ご指導をいただき、お礼を言わせていただきたいと思います。

## 菅谷祥太

今年度のジョイント合宿でテーマとした、地方自治体の Facebook 利用は私が前々から興味を持っていた行政と SNS の関係について、さらに一步踏み込んだものでした。そのため先進自治体の調査や情報収集などはとても楽しく行えましたし、その調査が紙面に論文としてできあがっていくのもやっけて達成感がありました。いままでよりも圧倒的に多いページ量や、坑井・体裁にも気を配らなくてはいけなくなったことなど戸惑うことも多かったものの、全体的に見ると得るものの多い挑戦だったと実感しています。

分科会の発表は都合により私一人で行うこととなりましたが、これもいい経験でした。もともと人前で発表するのはそれほど苦ではない性質だったのですが、長い時間をかけて自分がこれまでしっかり調べてきたことを発表するというのは、今までしてきた発表とはまた違った安心や自信を感じられました。内田さんの作ったパワーポイントの効果も相まって、自分ではなかなかいい発表ができたように思います。

ただ最後の講評で言われた通り、自分が打ち出している主張に見合うほどの根拠が提示できていない点や、またその根拠が弱い点など、改善すべき点もいろいろありました。同じくプレゼンも時間の問題もありましたが練習をほとんどせずいきあたりばったり、とい

った状態で臨んでしまったことも悔やまれます。人に自分の研究成果をみせる機会が多くなる4年生になるにあたり、その成果の魅力や主張をいかにひきだしてアピールできるプレゼンをするか、というのは大きな課題になると思います。これから改善していきたい課題としてしっかり考えていきたいです。

共通テーマについてはほぼ成田さんまかせになってしまい、色々負担をかけてしまいました。申し訳ないです。

ジョイント合宿でなによりも記憶に残っているのは、飲み会やその前後での他大学の生徒との雑談でした。宇都宮大学に通う私以上に宇都宮の交通事情に詳しい早稲田生や、酒瓶を片手に自分の足で情報を集めることの重要性を説く中央学院生など様々な人と会話をし、意見を聞くことができました。共通テーマ発表で熱くなった頭のままで飲み会に突入できたということもあわせて、非常に有意義な意見交換ができました。飲み過ぎだけに注意すれば最高の場です。

また、最後になりましたが論文の指導から車の運転までなにからななまでサポートして下さった中村先生にお礼申し上げます。学生全員で爆睡してしまい申し訳ありませんでした。

## 小野塚夕佳

2012年11月22日から24日までの3日間、千葉県館山市にて6大学合同ゼミ「ジョイント合宿2013」が開催されました。

発表内容は、まちづくり提案の内容を全国版に応用し、プレゼン時間を増やしたものです。まちづくり提案が前提として存在し、宇都宮市に限定したものから全国版に拡大することは難しいのでは？とと思っていましたが、今回私たちが発表したものは全国各地で言えることであろうという確信があったため、さほど困難ではありませんでした。

しかしプレゼン時間がまちづくり提案の3倍である30分に増加することが一番の課題でした。どのようにして30分のプレゼンにするのか。パワポ制作は私一人で行いましたが、アニメーションで時間を稼ぐなどをして何とか30分に引き伸ばそうとした感が否めないのももったいなかったなあと思います。

発表本番に関しては、20分強で発表が終わってしまい、質疑応答の時間を30分近く残してしまいました。逆を言えば、そのおかげで多くの質問を受けることができましたが、もっとしっかりとプレゼンの練習をすればよかったなと思っています。

まちづくり提案の発表会がこのジョイント合宿の直後にあったことから、この質疑応答は大変有意義なものでした。この場に出てきた改善点をまちづくり提案で表現することができ、有難かったです。また質疑応答で私が質問内容を理解できず困ってしまったときに、

すかさず成田くんが適切に応えて下さり、大変感謝しています。ありがとうございます。

共通テーマに関しては、私はまったくと言っていいほど関わらず申し訳なかったです。共通テーマと分科会をどちらもやり、どちらかが中途半端になってしまう、という現状を今後審議していかなければならないと感じました。

ジョイント合宿全体に関してですが、様々な大学の研究を聞くことができ、普段の授業とはまったく異なる空気を感じることができました。また他大学の質問の質が高く、強い刺激を受け私も見習って率先して手を挙げ、質問することができたので、ジョイント合宿に参加する前後で成長したなあと思いました。

打ち上げの際に他大学の学生・先生方にご迷惑をおかけしてしまいましたが、参加者の多くが協力してくださり、大事に至ることなくほっとしています。また、ある種そのおかげでたくさんの人と話が出来たり、仲良くなることができよかったです。と、思っています。

来年は幹事校です。問題をおこさず、さらには今年のジョイント合宿よりもさらによいものを創り出せるように、宇大だけでなく他大学と連携を取りながら、励んでいきたいと思えます。

## ノンティビッグ

2013年11月22日から24日にかけて千葉県館山でジョイント合宿に参加してきました。自分にとっては初めてのジョイント合宿なので行く前にすごく楽しみにしていました。当日になって、実際に参加すると思った以上に楽しくて素敵な三日間でした。他大学の発表を聞いて良い勉強になった以外にも自分の研究室の仲間とより仲良くなって、各大学の素晴らしい学生と一緒にご飯を食べたり、飲んだり、語り合ったり思い出いっぱい三日間でした。

中村先生長い運転してくれてありがとうございました。3年生お疲れ様そしてありがとうございました。

来年もまた参加したいです。

## 担当教員

### 中村祐司

「後手後手を挽回—あきらめないことの大切さ—」

決して諦観していたわけではないものの、ここ数年、教員の力のみで学生にジョイント参加を促すことの限界を感じ始めていたことも事実である。

研究室の所属が決まるのが7月末で既に前期終了の時期である。それを受けてこれからやるべきことを慌ただしく指示して夏休みを迎える。学部3年生にとっては参加してみな

ければジョイントの醍醐味は分からないのは当たり前だから、どうしても後期が始まる 10 月以降本格的な取り組みとなってしまふ。今回はさらに学生の始動が遅れた。

それにしても良く挽回したものである。反面教師の指導と思われるかもしれないが、教員が学生にやるべきテーマをあらかじめ設定しておいて、「俺についてこい」式の旗を揚げれば、その活動内容のやりがいや達成感はともかく、学生自身の問題意識は育たないままだと常日頃から考えている。その意味ではジョイントに臨んで、学生は教員から突き放されるように感じたかもしれない。

また、皆で取り組むということほど難しいことはない。それでも学生は、分科会にしても共通テーマにしてもぎりぎりまでチームワークを発揮しようとしていた。この点についても多くの収穫があったのではないだろうか。

学生の目の色が変わったのは何と 11 月中旬であった。社会人院生による助言や留学生院生の持つネットワークに助けられたとはいえ、ぎりぎりの状況でも学生はあきらめずに聞き取り調査の内容を組み立て実行した。その姿勢は他大学の教員すべてから高く評価されたことも事実である。

非常に嬉しかったのは、合宿 1 日目の夜に皆を集めて、次回幹事校について打診したところ、全員からやりましょう、来年度研究室に入ってくる今の 2 年生には自分たちがぜひこの貴重な経験を引き継がせたい、と反応してくれたことである。ジョイントが終わってからは、ゼミの時間はもちろん教員が担当する授業時間などを利用する形での、具体的な「戦略」を早くも詰め始めている。まさに教員冥利である。

学生は今回の経験を忘れることはないだろう。そのことは教員も同じである。だからジョイントは止められない。幹事校、会場校、そして参加校のすべてのメンバーに感謝申し上げたい。

最後に毎年の恒例となりつつある、自動車での行きと帰りの注意点を記しておこう。

6 時に宇大を出発したが、首都高川口 P.A に入る以前の渋滞に初めて遭遇した。P.A. を出た後の平井大橋までも（これは毎年だが）渋滞だった。この間、あくまでも湾岸線を目印に行くことが大切である。何と京葉道に入ってから 50 分くらい渋滞が続いたのも初めての経験だった。千葉市方面に向かう車はその出口で詰まっていたからであろうか。館山・富津自動車道を降りた後のコンビニ休憩後は 127 号線から 128 号線へ右折すると頭に入れておけば大丈夫だろう。ドライバーにとって渋滞が一番疲れるのが実感としてわかった。学生は全員がほぼ爆睡状態で話し相手がなく苦しかったが、後半はクラシック音楽を大音量で流し（学生はそれでも目覚めず）、とにかく安全を心掛けた。

帰りは昼ちょっと過ぎと早めに出たせいか、ほぼノンストップで宇都宮まで 4 時間弱と非常に早かった。疲労感はほとんどなかった。助手席の学生といろいろと話しができたことも大きい。海沿いに行って、富津・館山道の印に沿って右折し、後は京葉道の篠崎・小松川 I.C 下車で、一般道の東小松川交差点（1 回橋を渡った後、やや見えにくい手前右角のセブンイレブンと小松川病院を目印に）を右折すれば、あとは首都高・東北道経由・北

関東道経由で行けばいい。南伊豆出身の私にとって体感的に北限の地である宇都宮が近くに連れて、なぜだか研究室メンバーの一体感が増したように感じられた。